

序章	3
一 コト形絃楽器とは	3
二 風で鳴るコト形絃楽器「ウインドハープ」	6
三 箏篋三種	8
四 本書の構成	9
第一章 浄土の音	13
はじめに	13
一 風で動いて鳴るもの	13
二 自然に鳴るもの	18
三 自然に鳴る箏篋	22
四 箏篋の特殊性	25
五 美術作品にみる自然に鳴る音楽の表現	26
まとめ	27

第二章 日本の美術作品にみる箏篳篥……………31

はじめに……………31

一 豎箏篳篥……………31

二 鳳首箏篳篥……………32

三 金剛箏篳篥……………35

1 名称について 35

2 描かれた金剛箏篳篥 43

3 来迎図中の金剛箏篳篥 46

まとめ……………47

第三章 臥箏篳篥——日本の仏教建築を荘嚴するコト形絃楽器の源流……………51

はじめに……………51

一 先行研究……………51

二 箏篳篥の発生……………53

三 箏篳篥の形態……………60

四 フレットをもつコトの画像資料……………62

1 遼寧省・吉林省一帯 63

2 長江中流域の湖北省 64

3 西北部の甘肅省一帯 65

4 日本 66

5 まとめ 66

五 文献史料にみるフレットをもつコト……………67

六 朝鮮半島の玄琴の起源……………69

まとめ……………72

第四章 日本における箏篋の漢字表記と雅楽寮での使用……………79

はじめに……………79

一 漢字表記と助数詞による区別の有無……………80

二 雅楽寮での使用……………85

まとめ……………87

第五章 仏教建築を荘厳する「箏篋」の資料分析……………91

はじめに……………91

一 文献史料にみる「箏篋」……………91

1 奈良法華寺阿弥陀浄土院——正倉院文書をもとに……………91

2 奈良東大寺東西七重塔……………97

3 福岡観世音寺金堂……………98

4 京都法観寺五重塔……………99

5	滋賀比叡山東塔講堂・四王院	103
6	奈良法隆寺五重塔	107
7	京都平等院多宝塔	108
二	美術資料にみる「箜篌」	110
1	板彫法華曼荼羅（横蔵寺蔵）	110
2	『十卷抄』法華曼荼羅（円通寺蔵）	110
3	法華経宝塔曼荼羅図（談山神社蔵）	111
4	法華経見宝塔品（香川県立ミュージアム蔵）	115
5	阿部大経感得図（藤田美術館蔵）	116
6	高野山根本大塔を描いた資料	121
7	石清水八幡宮寺宝塔院（琴塔）を描いた資料	128
三	考古資料にみる「箜篌」——鳥羽離宮跡出土土コト形木製品	148
	まとめ	150
第六章 中国・日本における「風琴」「風箏」		
	はじめに	160
一	中国の詩文にみる「風琴」「風箏」	160
1	『男山考古録』の記述	161
2	「風琴」「風箏」の原義をさぐる	165

3	漢詩に詠まれた「風琴」	176
4	漢詩に詠まれた「風箏」	186
二	「風箏」は風か	199
1	中国の風の歴史	199
2	風に取りつける音具	203
三	唐代の史料にみる「風箏」	207
1	法進『沙弥十戒并威儀经疏』にみる「風箏」	207
2	『不空表制集』にみる「風箏」	208
四	日本における「風箏」	211
1	奈良東大寺大仏殿・東西七重塔	211
2	日本で「風箏」と呼ばれなかった理由	212
	まとめ	216
	第七章 仏教建築を荘厳する宝鐸の存在と音の意義	228
	はじめに	228
一	「鐸」の字義	229
二	インドの宝鐸	230
三	中国の宝鐸とその音	233
四	自鳴する様々な体鳴楽器の音の意味	236

1 宝鐸 237

2 鐘、磬 238

3 天鼓 241

五 浄土の宝鐸……………242

六 日本の宝鐸と鐘……………244

まとめ……………247

終章……………251

あとがき

初出一覧

図版一覧

索引

遺例は残念ながら存在せず、実態については不明な点が多い。臥箏篥については第三章で詳述するが、建築を莊嚴するコト形絃楽器「箏篥」は、同じくコト形である臥箏篥との共通性が認められるようである。

鳳首箏篥は、弓形ハープの一種で、インドで当時ヴィナーと呼ばれるものが西域を通じて南北朝の中国に入ったとされる。腕木の先端に鳳の首の装飾を施したことからこう呼ばれた。日本への伝来の確証はないが、美術作品の中に類似のものが確認できる。東アジアの美術に表されたこれら三種の箏篥の画像については第二章で述べる。

#### 四 本書の構成

仏教建築を莊嚴する「箏篥」は、以下、七章にわたって論証していくように、その源流を中国に求めることができる。七章の構成は次のとおりである。

第一章では、漢訳仏典に記述される仏の浄土で鳴る音（音楽）のうち、とくに、風で動いて鳴るもの、自然に鳴るものに焦点を当てる。本書が研究対象とする仏教建築を莊嚴するコト形絃楽器は、浄土の音を象徴させたものと考えられる。また、早期の漢訳仏典に見える「箏篥楽器、不鼓自鳴」という表現と、仏教建築を莊嚴するコト形絃楽器の名称「箏篥」との関連性について述べる。

第二章では、日本の美術作品に描かれた、各種の箏篥の画像を比較検討する。とくに、ネツクの先端に半三鈞はんさんこん杵しよつけた箏篥の画像も多数確認され、こうした箏篥の名称や発生について、新たな考察を試みる。

第三章では、仏教建築を莊嚴する「箏篥」との関連性が考えられる臥箏篥の中国における起源とその形態について述べる。臥箏篥は、中国隋代においては天子の楽器の一つとされたほど重視されていたにもかかわらず、文

献の記述は限られ、実物の遺品もなく、謎が残る。臥箏篥の發祥とその具体的な形態について、図像資料も含めて考察する。

第四章では、演奏に用いられた箏篥の日本への伝来と、日本の史料における箏篥の漢字表記の使い分けについて論ずる。箏篥は日本渡来後、奈良時代から平安時代にかけて、百済楽と高麗楽、それに唐楽で使われたといわれている。日本の文献においては、中国の史料には見られない漢字表記「筚篥」「箏篥」などが「箏篥」とともに用いられており、「筚篥」と「箏篥」は豎箏篥、「箏篥」は臥箏篥を指すというのが従来の説であった。<sup>(12)</sup>だが、この説はおそらく、江戸時代に記された『箋注倭名類聚抄』の注釈にもとづくもので、しかも複数の史料を精査すると、この説に合わない例が多い。従来の説を見直しつつ、これらの漢字表記が意味するものについて再考する。

第五章では、仏教建築を莊嚴する「箏篥」に関する文献史料、美術資料、考古資料を網羅し、その全貌をできるだけ明らかにする。日本における仏教建築を莊嚴する「箏篥」の存在は、奈良時代から明治時代までの多数の資料によって確認できる。資料の検証を通じ、「箏篥」の具体的な姿と、歴史の変遷を考究する。

第六章では、まず、第五章であつた江戸時代の文献史料が、建築を莊嚴する絃楽器の由来を中国の「風琴」「風箏」に求めていたことを手がかりに、主として唐から宋にかけての中国の詩文に見える「風琴」「風箏」に着目し、それらは風に鳴る絃楽器（音具）であつた可能性が高いことを論じ、両者の相違について考察を行い、語義の変遷に関する私見を述べる。

続いて、中国唐代の仏教建築と「風箏」について論述する。日本に渡来した唐僧、法進による『沙弥十戒并威儀経疏』と、唐の不空の上表や関係文書を集めた『代宗朝贈司空大弁正広智三藏和上表制集』の二つの文献にはそれぞれ、当時の仏教建築に「風箏」が吊られていたことがうかがえる貴重な記述があり、詳しくとりあげる。

さらに、日本においては中国と異なり、建築を荘嚴するコト形絃楽器を、「風箏」ではなく「箏篋」と記す場合がほとんどであることから、その傾向が示す意味を採る。

第七章では、「箏篋」とともに仏教建築を荘嚴する宝鐸ほうたくの存在や音の意義について述べる。宝鐸は、舌ぜつをもつベル型の楽器で、日本および中国においては、コト形絃楽器とともに、建築の檐下えんげにかけられたことが確認できる。宝鐸のもつ意義や、その音の役割について、文献史料にもとづき考究する。

最後に終章で、本書の考察を通じて明らかになった事柄を総括する。

- (1) 李純一『中国上古出土楽器総論』第一七章 瑟（北京・文物出版社、一九九六年）。
- (2) *The New Grove Dictionary of Musical Instruments*, London: Macmillan, 1984.
- (3) Mins Minssen et al. *Äolskharfen—Der Wind als Musikant*, Frankfurt am Main, Verlag Erwin Bochinsky, 1997.
- (4) 前掲註(2)書。
- (5) *A Dictionary of Music and Musicians*, London, New York: Macmillan, 1899.
- (6) 同右。
- (7) 原文は次のとおり。“.....and in an old Hindu poem, quoted by Sir William Jones, the *vina*, or the lute of the country, is said to have produced tones, proceeding by musical intervals, by the impulse of the breeze. In the present day the Chinese have kites with vibrating strings, .....”
- (8) *The Works of Sir William Jones, Volume 2*, New York: Garland Publishing, 1984.
- (9) ウォルター・カウフマン『人間と音楽の歴史 古代インド』（音楽之友社、一九八六年、三五頁）。
- (10) 岸辺成雄「箏篋の淵源」（東洋音楽学会編『唐代の楽器』音楽之友社、一九六八年、一六九～二〇九頁）。初出は「箏篋の淵源 上」（『考古学雑誌』第三九卷第二号、一九五三年）、および「箏篋の起源 下」（『考古学雑誌』第三九卷第三・四合併号、一九五四年）。『岸辺成雄博士業績目録』によると「起源」は「淵源」の誤り。『唐代音楽の歴史的研究』

の字が、転写の際に二字に分かれてしまったもので、本来は「筵篋」であったのではないか。もしそうであるならば、観世音寺金堂には「筵篋」が懸かっていたが、延喜五年当時はすでに「筵篋」の緒が欠失していたことになる。この記述により、九一〇世紀頃、九州の地でも仏教建築に「筵篋」が懸けられていた可能性が考えられる。

#### 4 京都法観寺五重塔

京都市東山区に位置する法観寺は、聖徳太子が如意輪観音の教示により五重塔を建て仏舍利を納めたのが始まりともいわれ、五重塔をもって本堂とし、初層内部には五智如来が安置されている。建久二年（一一九二）源頼朝による再建後、正応四年（一二九二）に落雷により焼失したが、延慶二年（一三〇九）北条貞時・山内円成尼が復興、永享八年（一四三六）に再び炎上、永享十二年（一四四〇）足利義教が再建し、現在に至る。この法観寺の五重塔が創建後の天暦年間（九四七～五七）に傾斜した際、当時東隣に位置していた雲居寺の僧浄蔵が加持して元に戻したという説話が複数の文献に収録されている。注目すべきは、それらの説話に、塔が垂直に戻る際、「宝鐸」と「筵篋」が鳴ったと記されている点である。

まず、一一世紀から一二世紀初頭にかけての成立とされる『扶桑略記』卷二五には次のようにある。

天暦の比、沙門浄蔵、八坂寺に住まへり。……同じ比。八坂寺の塔傾斜す。殿上侍臣等、多く来たりて之を見る。浄蔵云はく、今夜試みに之を直立せしむべき由、約諾しすにをはんぬ。夜、露地に坐し、塔に向かひて加持す。漸く亥刻に及び、微風吹き来り、塔婆震動し、宝鐸筵篋、動きに随ひ和して鳴る。明くる日之

天曆之比、法師寄住法觀寺。六年春三月、卿相重臣、実頼中将等、朱紫貴客等数十人、依花而群来之。爰見件寺塔、向王城而傾曲如何。法師云年来欲直之由。法師又云今夜直試者、衆庶聞已各以□還。法師以亥刻坐於露地、加持宝塔還於本坊。□弟子仁璫、奇此事、寄眼於塔、徘徊庭中。及至子刻、微風起西北方来吹、塔婆宝鐸箆篋、搖擊和鳴。聞之而大底知塔之端直也。然而当夜陰、未見其直否之体、終宵不審。達旦得明、已見直時空之形。因茲庫車軟輿貴公主、香衫細馬豪家郎、上卿下品、雲集礼拜矣。<sup>14)</sup>

『扶桑略記』と大筋はほぼ同じであるが、幾分脚色され、浄藏が塔の傾斜を直した年は、天曆六年（九五二）となっている。浄藏は亥の刻に加持をし、本坊に戻った。弟子の仁璫（伝不詳）が、目を凝らして塔を見ながら徘徊していたところ、子の刻に西北から風が吹き、「宝鐸箆篋」が「搖擊和鳴」したのを聞いて塔が垂直になったのを知ったという。「搖擊和鳴」とは、「宝鐸」の風招が揺れ舌が鐸の内側を撃ち、「箆篋」が鳴りかわしたことを指すと考えられる。なお、建長元年（一二四九）成立の『日本高僧伝要文抄』第一巻にも同様の説話が収録される。<sup>15)</sup>

右の記述から、法觀寺の五重塔には宝鐸と並んで「箆篋」が懸けられていたことが知られる。

これを裏づけるように、「箆篋」を懸けた五重塔の図が法觀寺に残されている。それは、同寺蔵の卷子本の巻頭に収録された境内図である。<sup>16)</sup> 当卷子本は、三巻一組で箱に入っており、箱書はない。この三巻本の内容を精査する機会にまだ恵まれないが、おそらくは寺伝史料を書写収録したものである。三巻とも表装は同じ布地を使用しており、外題、奥書など、年代や由来を特定できる記載はないが、法觀寺住職によると室町期の書写という。

三巻のうち二巻には、ともに巻頭に境内図が収録されており、残りの一巻は文書のみである。二つある境内図の



図5-1 法観寺境内図と拡大図  
巻A 巻頭

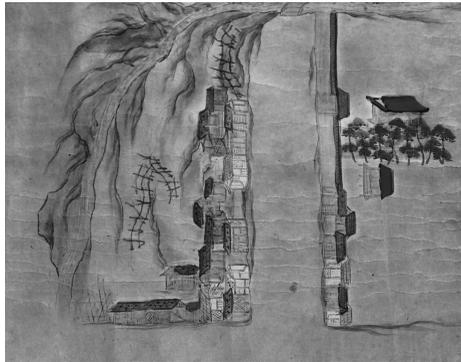


図5-2 法観寺境内図 巻B 巻頭

うち、一つは五重塔を中心として楼門や回廊、太子堂などが描かれた(図5-1)、もう一つは塀の一部と、寺に属したと考えられる堂が二棟と、周辺の民家らしきものが描かれている(図5-2)<sup>(17)</sup>。いま仮に、巻頭に五重塔境内図のあるものを巻A、別の境内図のあるものを巻Bと呼ぶ。巻Aと巻Bの巻頭境内図の料紙と文書の料紙は同じものと思われる、また、料紙継目の背面には両巻ともに巻末にいたるまで同一の裏判(花押)がある。

これら境内図が、いつ頃の法観寺を描いたものかを考えてみたい。巻A所収文書の年代の上下限は未調査であるが、巻B所収文書の年代の上限は建仁二年(一一〇二)、下限は応永年間(一三九四〜一四二八)で、鎌倉時代初期から室町時代中期にあたる。よって境内図は、永享八年に炎上する前の伽藍を描いたもの、もしくは古図の写しということになるのかもしれない。

## あとがき

思いおこせば、仏教への関心がめばえたのは、幼少のみぎりに通っていた寺院経営の幼稚園で、ほとけさまの歌を教わった頃だろう。「口ではなんにも言わないが、あなたのこと知っている」ほとけさまとは一体どんな存在なのだろうと考えさせられた。

長じて大学の文学部に進み、東洋哲学か東洋美術史か迷った挙げ句、後者を専攻した。中国敦煌莫高窟の壁画に描かれた、宙に浮かぶ楽器などを見ているうちに、私の関心は仏教と音楽をめぐる領域へと向いていった。そこから発展させた研究を論文にまとめ、二〇一四年一月に早稲田大学文学研究科より博士学位を得た。本書はその学位論文を加筆修正したものである。

学位論文の執筆にあたり、早稲田大学の肥田路美先生に丁寧なご指導を賜った。また、学位審査において早稲田大学の内田啓一先生、古屋昭弘先生、法政大学のステイヴン・G・ネルソン先生から多くの有益なご指摘を賜った。

長年、フルタイムの業務と、研究・執筆活動との両立に人知れず腐心してきたが、おかげさまで本書を世に問うことができ、ありがたく思う。

上梓にあたり、公益財団法人 出光文化福祉財団の出版助成をいただき、思文閣出版の原宏一取締役、編集の三浦泰保氏、思文閣本社にいらした柿田由羽氏に大変お世話になった。

画像掲載にご協力をいただいた皆さま、書中にお名前をあげた皆さまのほか、多くの方々からご教示、ご援助を賜った。この場を借りて深謝申し上げます。

中安真理

二〇一六年七月

ふ	
『風俗通義』（『風俗通』）	
	55, 58～60, 81, 164
『不空表制集』 → 『代宗朝贈司空大弁正広 智三藏和上表制集』	
『父子合集経』	26
『扶桑略記』	99, 101, 109
『仏祖統紀』	237, 241
へ・ほ	
『別尊雜記』	33, 42
法観寺	99～102
鳳首篋篋	
	8, 9, 31～3, 35, 42, 47, 59, 85, 86, 251
鳳頭篋篋	33, 35, 47
法隆寺	52, 62, 66, 107, 108
『北史』	202
『北夢瑣言』	195
法華経宝塔曼荼羅図	
	107, 111, 115, 116, 125
『菩薩念仏三昧経』	25
法華寺	91, 92, 97, 111, 148
ま	
馬王堆	55, 68
『摩訶般若波羅蜜経』	213
マトゥラー	26, 28

み・む	
『都名所図会』	139, 143, 145
『無量寿経優婆提舍願生偈』	13, 14
『無量寿経優婆提舍願生偈註』	13, 15
も・や	
『文殊師利現法藏経』	23, 24
『山城綴喜郡誌』	143
『山城名勝志』	142
ら	
『礼記』	57, 167, 182
来迎図	31, 35, 46～8, 252
『洛陽伽藍記』	233
り	
『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』	38
両界曼荼羅図（血曼荼羅）	44
『令集解』	83, 84
両部大経感得図（感得図）	
	96, 116, 118, 119, 149
る	
『類聚国史』	83
『類聚三代格』	84
わ	
和琴	82, 119, 121, 147～9
『倭名類聚抄』	80, 85, 145

『七女経』	23
瑟	5, 6, 22, 36, 37, 52~6, 58~61, 66, 72, 81, 82, 163, 164, 175, 208
『十卷抄』	32~4, 110, 112
『事物紀原』	200~2
『事物紺珠』	170, 171
『釈名』	56, 57, 59
『法弥十戒并威儀経疏』	10, 207, 215, 254
『拾芥抄』	82
『周書』	234
十部伎	68, 85, 86
『詢莠録』	202
正倉院文書	83, 91~3, 116, 128, 215, 256
『聖徳太子伝私記』	107
『浄土論』 → 『無量寿経優婆提舍願生偈』	
『浄土論註』 → 『無量寿経優婆提舍願生偈註』	
『諸尊画像集』	34, 42
『諸仏境界真实経』	40
新羅琴	82, 108
『新五代史』	203
『新唐書』	202
す・せ	
『隋書』	8, 51, 85, 216, 252
『説郭』	168
『説文解字』(『説文』)	161, 162, 168, 229, 230
『箋注倭名類聚抄』	10, 79, 81, 145
そ	
箏	4, 5, 22, 51, 61, 72, 82, 85, 118, 125~8, 142, 145, 147, 149, 150, 161, 162, 164~6, 175, 176, 188~191, 193, 194, 196~8, 206~8, 211, 212, 215, 217, 253, 254
『宋雲行紀』	230, 231
『宋高僧伝』	237, 240
『宋書』	57, 59, 60, 67
『続高僧伝』	238
た	
『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』	82

『體源鈔』	51, 52, 61, 62, 72, 87, 108, 110, 164, 252
大興善寺	208, 209~11, 255
『太上一乘海空智蔵経』	213, 215
『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』	10, 208~10, 254
『大唐西域記』	232
『大日経疏演奥抄』	42
『大日本国法華経験記』	106, 246
『大般涅槃経』	214
『大方広仏華嚴経(八十華嚴)』	19, 26
『大方広仏華嚴経(六十華嚴)』	243
高雄曼荼羅圖像	44
堅箏篋(豎箏篋)	8, 10, 31, 32, 42, 47, 51, 59, 79, 81, 85, 86~8, 92, 96, 251~3
ち	
『中天竺舍衛国祇洹寺図経』	25, 246
『中右記』	109
つ・て	
『通典』	52, 58~62, 66~8, 72, 73, 81, 252
『田氏家集』	202
と	
東大寺	32, 91, 92, 97, 98, 211, 212, 215, 245
『東大寺要録』	97
唐本曼荼羅図	42
『唐六典』	85
敦煌変文	165
な	
南響堂山石窟	27
『南史』	68, 201, 202
に・ひ	
『日本後紀』	83, 244
比叡山	103, 106, 135, 136, 139
『秘密儀軌伝授口決』	35
平等院	108~10
琵琶	22, 23, 27, 41~3, 45, 52, 58~61, 67, 81, 82, 113, 165, 166, 252

え	
『叡岳要記』	103, 105
『营造法式』	194
『延喜五年観世音寺資財帳』	98
『延喜式』	82, 87
『燕京歳時記』	204, 207
お	
岡寺	118, 119
『男山考古録』	140, 144, 146, 160, 161
か	
『槐記』	161, 162
『開元天宝遺事』	169
臥筌篋 8~10, 31, 51, 52, 61, 66~9, 72, 79, 81, 85~8, 96, 149, 150, 252, 253	
『楽書』(陳暘)	35, 68
『覚禅抄』	34
『羯鼓録』	235
『楽府雜録』	33
伽耶琴	72
『漢書』	56, 59, 201
観世音寺	98, 99
『観世音寺資財帳案』	82
『桓譚新論』	60
灌頂幡	52, 62, 66, 69
『韓非子』	71, 199
『観普賢菩薩行法経』(『観普賢経』)	25, 112
『観弥勒菩薩上生兜率天経』	20
『観無量寿経』	17, 19
き	
『九家集註杜詩』	188
九部伎	68, 85, 86
琴(きん) 4, 5, 22, 51~4, 56~9, 68, 70, 71, 81, 82, 113, 118, 161~3, 165~7, 172~6, 181~3, 185, 186, 193, 208, 216, 254	
く	
『弘賛法華伝』	239

百済琴(クダラコト)	80, 85, 87, 216
『旧唐書』	52, 59, 61, 67, 68
け	
『藝文類聚』	61
玄琴	69~72, 87
こ	
『孔子家語』	182
高野山参詣曼荼羅(サックラー本、成相 寺本、花岳寺本)	122, 125~8, 150, 253
高野山水屏風(山水屏風)	122, 124, 125
高野大師行状図画(行状図画)	122~5, 128
『後漢書』	54, 69
『古琴疏』	173
『古清涼伝』	239
『国家珍宝帳』	82
琴(こと)	80, 94, 95, 118, 119, 140~5, 161~3, 190
『後法興院記』	109
『金剛界大法対受記』	41
金剛歌菩薩	35~7, 39~47, 251
『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王 経』	39, 243
『金剛頂大教王経疏』	244
『金剛頂瑜伽中略出念誦経』	38
『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要』	36
『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』	35, 36, 48, 251
さ	
『西大寺資財流記帳』	83
『三国遺事』	72
『三国史记』	69, 70, 72
『三代実録』	245
三昧耶形	35, 36, 40, 41, 43, 46, 47, 121, 251
『山門堂舎記』	103, 105
し	
『史記』	52~4, 59, 71, 201
『四種護摩本尊並眷属図像』	42

	て	
鄭玄		57
田錫		196, 198
	と	
道宣		25, 238, 246
杜甫	162, 187, 188, 190, 198, 213	
豊原統秋		51, 62, 109, 110
	な・は	
長濱尚次	140, 144, 160~2, 164	
梅堯臣		181
服部勝吉		91
林謙三	8, 23, 52, 92, 228	
般若		37, 40
	ふ	
馮浩		194
馮時行		178
不空	10, 35~9, 48, 207~10, 243, 251, 254	
福山敏男		92, 103
藤原寛子		108, 109
藤原忠通		109
	ほ	
法進	10, 199, 207, 208, 211, 215, 254	
鮑溶		191, 198
菩提達磨		234
ホルンボステル		3
	ま・み	
マウル		204
源順		80, 145
宮次男		111~3
	や	
柳澤孝		116~9
山科道安		162
	よ	
楊齒瀏		52

楊慎		170
	り	
李嶠		164
李惠求		52, 87
李周翰		175
李純一		230
李商隱		193, 194
李白	162, 186, 198, 213	
李壁		185
劉禹錫		191
劉義慶		61, 172
	れ・ろ・わ	
冷泉為恭		142
楼鑰		183
渡辺貞磨		246
	【事項】	
	あ	
『阿娑縛抄』		103
阿廢蘇觀音	32~5, 42, 47	
『阿弥陀經』		17
	い	
板彫両界曼荼羅		45
『一切經音義』		26, 229
石清水八幡宮	128, 130, 133, 136, 138~41,	
	143, 145, 146, 160, 162	
石清水臨時祭・年中行事騎射図屏風		142
	う	
ヴェーナー		7~9, 22, 23, 41, 43, 45, 251, 252
ウインドハーブ		6~8, 172, 256
『芸窓私志』		161, 162, 168

# 索引

(人名／事項)

【人 名】		く・け	
		虞汝明	173
		嵇康	172, 173
		元稹	192, 198
	あ	こ	
天沼俊一	91	高駢	195, 196
安然	41	呼韓邪单于	54, 55
	い	後藤守一	51
韋驥	178	近衛家熙	162~4
井伏鱒二	190	金剛智	35, 37, 38
	う・え	さ	
ウィリアム・ジョーンズ	7	ザックス	3
円仁	211, 244	澤口剛雄	51
	お	し	
王安石	162, 169, 184	司空曙	190
王桀	175	竺法護	22~4, 27, 215
王鑿	171	謝朓	174
王洙	189	謝濤	181
	か	朱諫	187
郭知達	161, 188, 189	浄藏	99~101
狩谷椽斎	79, 81, 145	真常	35
韓維	182	せ	
貫休	176, 177	齊己	176
	き	関野貞	91, 92
岸辺成雄	8, 51, 52	た・ち・つ	
牛龍菲	27, 52, 171	龍遼一	51
キルヒャー	6	陳暘	35, 68
		筒井英俊	92